

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	テオクリトス 第七歌「収穫祭」
Author(s)	八木橋, 正雄
Citation	プロピレア , 29 : 163 - 158
Issue Date	2023-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054850
Right	Copyright (c) 2023 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



テオクリトス

第七歌「収穫祭」

八木橋 正雄 訳

それは、私とエウクリトスが

町からハレイス川に向かった時だった、

三人目のアミンタスを連れて、デメテル女神のために、

ブラシダモスとアンティゲネスが、

収穫祭を催したから、

二人はリュコペウスの息子で、クリュティアと

カルコンの末裔、

古の高貴な流れを引く二人、

カルコンが岩のうえに膝を押し当て

足元に湧き出させたブリナの泉には

ポブラと楡が緑の葉を茂らせ、天蓋のように
覆いつくしていた。

道半ばも行かず、ブラジラスの碑も見えぬ辺りで、一〇

ムーサイ神のお陰にて、キュドニアの在る人に

出会った。

リュキダスというのがその人の名で、

山羊飼いで、山羊飼いというのも際立つて

その形で見間違えようもない。

肩から鹿毛色の厚手のごわごわの山羊皮を掛け、

新しいチーズの匂いがする、

胸のまわりに古い外着を締めるように巻き、

右手には野生のオリーブの曲がった牧羊尺を

握っていた、

感じの良い目をして幾らか微笑みを浮かべて

私に言った。

二〇

「シミキダス、何処へ足を向けるのか、昼の今時、

トカゲも垣にもぐり、冠羽のあるヒバリも見えない頃、

会食に呼ばれて急ぐのですか？ 町の誰かの葡萄絞りに

足を貸しに急ぐのですか？

なぜって、あなたの足が走ると、石ころが靴に当たって

響き渡る。」

私は答えてあなたに言った。

「親愛なるリュキダス、皆が言っているが、あなたは、牧人のうちでも、農夫のうちでも、

葦笛にかけてはとても卓越していると、それを聞いて、私たちはとても嬉しい。

でも、私も比肩すると念じている。

で、この旅路は、収穫祭へ行く途上なのです、

友人たちが皆で、

美しいペプロスを纏ったデメテル神に、豊かな穀物の

初穂を捧げるために、

さあ、牧歌を歌いながら、朝だ、友連れだ、

共に行こう、

私ののどにはムーサイ神の精髓が溢れ、

まさに皆が言うところ私は名歌手です。

でも、そんなにおめでたくはありません、

ゼウス神にかけて、私の考えでは、

サモスの名高い歌手シケリダスやピレタス（ホメロス）

を超えるものとは思えない、

カエルがコウロギと競うようなもの。」

このように語ったのもよく考えたうえ、山羊飼いは、

嬉しそうに微笑んで語った。

三〇

「あなたにこの杖をあげよう、

なぜならあなたは真実のために創られたゼウス神の
係累そのものだから、

私とてオロメドンの山の高さのような家を

作ろうとする大工や、

キオスの歌人に比肩しようと叫びちらし、

無駄な努力をするムーサイ神の鳥たちを憎みます。

さあ、シミキダスさま、牧人の歌を始めましょう、

すぐに、

私も、友よ、このあいだ山で創った小品が、

あなたのお気に召すかどうか、見てみてください。

五〇

「リュキダスの歌」

アゲアナクスのミュティレネの美しい船旅は、

たとえ西の夕べに山羊座のぼり、

南風が波をうならせ、オリオンがオケアノスに

足を浸す頃であろうとも、

アプロディタに焼かれるリュキダスを

救ってさえくれれば、

なぜなら、彼への思いが、私を焦げ付きさせるから。

ハルキュオネ達が、波も海も、海底の藻をかきみだす

南風や東風でも、鎮めてくれよう。

ハルキユオネ達は海から漁をする生き物のうちでも

蒼いネレイデス達のお気に入り。

六〇

すべてのことが、ミュティレネへと港へと航行する

アゲアナクスに、相応しいように。

その日、私は、アニスやバラやアラセイトウの花冠を

頭にのせて、

ブテレア産の葡萄酒をクラテールから酌み、

火のそばで横になり、

誰かがソラマメをその火で炙ってくれる。

敷き藁に、肘まで積み上げるのはオオグルマ、

ツルボラン、柔らかなパセリ。

また、穏やかにアゲアナクスを思い出しながら、

唇をつけながら葡萄酒の澱まで飲み干す。

そうこうしているうちに、二人の牧人が

私に笛を吹いてくれる、

一人はアカルナイの、もう一人はリュコペの人。

近くでティチュロスが歌うでしょう。

以前、牛飼いのダブニスさまがクセネアさまに

恋をしたとき、

どんなにも山々が嘆きを駆け巡らせ、ヒメラの川辺の

コナラの樹々が、彼を嘆き、

ダブニスさまがハイモスの雪のようにやつれてゆき、

アトス、ロドペー、

地の果てのカウカソスの長き裾野の雪のようにも

溶けていかれた。

そしてまた歌うのは、以前おおきな大箱に、

悪しき主人が羊飼いを生き埋めにし、

鼻の低いミツバチたちが野原からやつてきて、

香り良きセイヨウナシの箱のなかの、

羊飼いを、たおやかな花々で、ムーサ神が唇に

甘美なネクターを注いだから。

おお幸いなるかなコマタスよ、あなたは耐え抜いた。

心地よきことごとで、あなたは箱に閉じ込められ、

蜜蜂の巣板で育てられ、

閉ざされた一年間を耐え忍んだ。あああなたが

今生きる者のなかにあればよいのに。

そうしたなら、あなたのために山で美しい山羊たちに

草を食ませ、あなたの声を聞くよう、

コナラか松の根元であなたは横になり、

心地よい歌を歌うだろう、神々しいコマタスよ。」

彼がこのように歌い終えたあと、

八〇

私はつぎのように続けた。

九〇

「いとしいリキダス、多くのよき歌を、山で牛たちを世話している私にニンフ達が教えてくれた。

この名声はゼウスの座にもものぼっていくだろう、中でも特に良いものを、あなたにお聞かせしよう、なぜならあなたは、ムーサイ神の友なのだから。

シミキダスの歌

エロース達はシミキダスにくさめをして、

あわれな彼はミュルトに、春に山羊達が恋するように

激しい恋をする。

だが彼のほんとうに親しいアラトスは、この少年に

心を悩ませている。

しかしアリスティスが知っている。

ポイボス神でさえ三脚のかたわらで堅琴に合わせて

歌うのを、潔しとされるだろう、

一〇〇

良い人で、それは優れた人、彼が、いかにアラトスが骨から少年に焦がれているのを。

パーン神よ、愛しいホモレの地の神よ、願わくは、

あの少年が、自分で、

わが友の両の腕に飛び込むようにしてください。

軟弱なピリノスでも、他の少年でもいいから。

もしも、愛しいパーン神よ、あなたが

そうしてくださいのなら、

アルカディアの少年達が、あなたの脇腹や肩を、

肉が少ししか手に入らないからといって、

つるぼ（海葱）で打ちたたたくことがないでしょう。

でも、そうしてくださるのなら、体を爪で

引っ搔かれて、イラクサの上に

横たわるでしょう。

一一〇

冬の間にエドニス人の山々に住み、

大熊座に近いヘブロス川にむかう。

あなたは夏にはブレミュエス人のさまよう崖の下、

ナイル川も見えない、はるかエチオピア人の

ところに住む。

そして愛の神達、鮮紅色の林檎にも似た神々、

金髪の女神ディオネの聳え立つ神殿から、

ヒュエティスやビュプリスの心地よい流れから、

魅力的なピリノスを、あなたの矢で、射ってください。

私の友を憐れまない不心得者を矢で射ってください。

もう、彼もセイヨウナシよりも熟れて、

女たちに、

「ああ、ピリノス、盛りの花もあなたから

一二〇

落ちてゆく」と。

もう彼の家の前で待ちあぐねることは止めよう、アラトス！

私達の足を痛ませるのはやめよう。

雄鶏が鳴く翌朝を凍てつく寒さで凍えるのはやめよう。

モロンだけがこんな試練に耐えられよう。

私達は心を静め、老婆に来てもらつて、よくないものをつばをかけて追い払ってもらおう。」

私はこう歌った。すると彼は微笑んで牧羊杖を

ムーサイのしるしにと私にくれた。

それから左に曲がつて

ピュクサへの道を通った。

一三〇

私とエウクリトスとはプラシダモスのところへ向かい、可愛いアミュンタスとともに

刈りたてのブドウの若木とマスチックの香りのなかの

床に横たわった。

私達の頭上には、ポブラと楡の樹々が茂っていた。

ちかみには、ニンフ達の洞から、清らかな泉が

つぶやきながら流れ出る。

ふさふさした條々には日に焼けたセミ達の

物憂げななき声が響き、

緑のカエルが遠く、覆い茂る灌木の茂みから

鳴いている。

ヒバリ達とゴシキヒワ達が歌いキジバトが

つぶやくように鳴く。

鹿毛色のミツバチ達が泉の回りをぶんぶん飛び回る。

すべてが、豊かな夏の肥沃さに満ち溢れ、

セイヨウナシの実が足元に、

リンゴの実が私達の足元に溢れるように転がる。

スモモの枝も実をたわわに地面にしな垂れる。

四年寝かせた樽の口から封が外される。

パルナツソス山の頂に住むカスタリアのニンフ達よ、

嘗てポロスの岩屋で、老いたキロンが、

ヘラクレスに供したクラテールとは

このようなものだったのか、

また、アナポス川の辺で、山を船に投げつけた

豪傑な羊飼いのポリュペモスを、

洞で足取り軽く舞踊にさそつたのは、

このようなネクタールだったのか、

ニンフ達よ、あなた達があのとき

収穫の糧の神デメテルの祭壇の脇で、

混ぜ合わされたのは、そのような

一四〇

一五〇

ネクタールではなかったのか、

またあのような穀物の山に、

私が大きな箕を突き立てたいものだ。

両手に穀物の束と芥子を持つ女神が微笑むときに。